“団員たちは私の誇り”

団長 福永晋作（ふくながしんさく）さん

Shinsaku Fukunaga（上砥川）

23歳の時、地元の人に誘われて入団し、平成27年に第1分団（飯野地区）の副分団長として指揮命令をする立場になりました。

熊本地震の際は、救助活動や避難者の把握、避難誘導、交通整理などあらゆる場面で、団員が活躍しました。地元では飯野小体育館が使用できなかったため、私は、校舎内に避難者を収容できるよう学校や役場と調整。幹部として町の災害対策本部会議にも参加しながら、団員たちに指示を出し、気付けば発災から4日間寝ずに活動していました。仕事を2週間休ませてくれた職場や、家族の理解には感謝し尽くせません。

地震の大変さを目の当たりにして、辞めたいと思った団員も多くいると思いますが、現在も意識高く活動してくれています。私も含め、今は会社勤めの団員が増えていますが、町の安全のため本当によく動いてくれて、団員の皆さんには、感謝しかありません。団長になると決まった時は自分に務まるかどうか不安でしたが、「自分の一声で全団員が動く」という緊張感を持って、団員の安全確保を最優先に考えて行動しています。

消防団は火を消したり、災害現場で活動するばかりでなく、地域の祭りや行事でも活躍し、地域と深くつながることで、いざというときの頼れる存在でもあります。小さい頃から益城に住んでいる人はもちろん、町外からこの町に移り住んだ人たちもぜひ消防団に入り、地域やそこに住む人たちとのつながりを広げてほしいと思います。

令和3年度 新入団員

森川泰臣（もりかわたいしん）さん

Taishin Morikawa（田原）

熊本地震の時サッカー選手だった私は、他の選手たちと県内各所の避難所を回り、スポンサーからの支援物資を配布していました。益城町の物資集積所を訪れた時、自らも被災しながら町のために活動する消防団員を見て感銘を受け、何日も休まず活動し続け疲弊していた団員さんたちに少しでも休んでもらえたらと、当時大学生だった弟が所属していたサッカー部のみんなと協力して手伝ったのを覚えています。

地元に戻り、子どもたちにサッカーを教えながら実家の焼肉店で働き始めて3年。幼少期から仲がいい人たちと共に入団を決意しました。まだ火災現場に出動したことはありませんが、大雨の後、高齢女性の自宅敷地内に流れ込んだ土砂の撤去作業を行った時はとても喜んでくれて、私もうれしくなりました。

まだ1年目で分からないことが多いですが、先輩団員たちが優しく一つ一つ教えてくれるので不安は全くありません。知識を身に付けて活動の幅を広げ、いずれは自分が後輩に教える。そんないい循環ができればと思っています。先輩や一緒に入団した仲間たちと共に、現場で人の役に立てるような団員になっていきたいです。